



口之津歴史民俗資料館では、古野電気の歴史を見学することができます。

昭和30年、「もつと広い視野での経営」を求め、兵庫県西宮市に本社を移し、船舶用医療用機器、情報通信機器の世界的なメーカーに成長させました。

その後、市は、名誉市民証が旧南有馬町名であること、その功績が顕著であることなどから、改めて名誉市民証を贈ることを計画。今年3月29日、実現したものです。なお、名誉市民は10人となっており、いずれも合併前に認定



名誉市民証を今年3月29日(日)に授与

名誉市民の古野清孝氏・清賢氏はこんな人

両氏の軌跡

古野清孝・古野清賢氏は、1938年、南有馬町（現南有馬支所付近）で、ラジオの販売、修理を始めました。その後、口之津町に事業所を移し、昭和13年に古野電気商会を設立。口之津町で、魚群探知機を発明し、実用化に成功しました。

昭和30年、「もつと広い視野での経営」を求め、兵庫県西宮市に本社を移し、船舶用医療用機器、情報通信機器の世界的なメーカーに成長させました。

名誉市民としての古野氏

旧南有馬町から平成17年12月16日に南有馬町名誉市民の称号が贈られています。

平成18年3月31日に南島原市が誕生。名誉市民条例は、同年12月市議会に名誉市民条例で定められ、全会一致で、引き続き名誉市民となりました。

その後、市は、名誉市民証が旧南有馬町名であること、その功績が顕著であることなどから、改めて名誉市民証を贈ることを計画。今年3月29日、実現したものです。なお、名誉市民は10人となっており、いずれも合併前に認定



昨年の授賞式にも駆けつけていただきました

●南島原市ふるさと応援寄附
両氏は、南島原市のふるさと納税制度である「南島原市ふるさと応援寄附」で多額を寄附。

両氏以外はすでにお亡くなりになっていて、今回、合併後初めての名誉市民証の授与となりました。

ほかにもお世話になっています

●古野科学賞
平成16年から両氏の私費を投じ、旧南有馬町で、古野賞科学技術展を開催。南島原市となった現在も、市内小中学生の夏休み期間中の自由研究成果の発表の場となっています。

古野 清孝（ふるのきよたか）
古野電気の創業者。漁業を科
学化したいとい
う一心から魚群
探知機の開発に挑み、1948年、
世界に先駆けて魚群探知機の実用
化に成功した。その後ロラン受信
機、レーダーなどの画期的な技術
開発を主導し、数多くの特許を取
得。社長、会長を経て、現在88歳
ながら名誉会長として活躍中。大
正9年生まれ。勲三等瑞宝章（平
成3年）など受章（賞）多数。



古野 清賢（ふるのきよたか）
15歳でラジオ
技師の資格を取
得。兄の開発す
る魚群探知機の
実証実験を担当し、その実用化に
大きく貢献した。徹底した現場主
義と、指導力で兄清孝と経営を
担った。社長、会長を経て、現在
常任相談役。現場をこよなく愛し、
時間があれば、現場を訪ねる毎日。
旭日小綬章（平成19年）など受章
（賞）多数。

魚群探知機を創造した二人

名誉市民 古野清孝・古野清賢物語

17歳、一人の出発

「俺は、中学を4年で辞める」

兄清孝がそう言って、家族を驚かせたのは、旧制中学3年生、16歳のときだった。

「事業をやる。金儲けをするのだ」という言葉に周囲が驚いた。清孝は、特に理科、物理の成績がずば抜けていたが、人は、成績よりも彼の向学心を評価していたという。そんな彼が勉強を辞めると言うのだ。彼は言った。「父さん、母さんに苦労をかけるのはもう耐えられないんだ」

父の退職。当時、多くの弟たちを養うための苦渋の決断だった。

世界の「フルノ」。その歴史の始まりを告げる、まさに産声ともいえる彼の宣言だった。

ラジオ修理業から船の電気機装工事へ

南有馬町大江で幼少期を過ごした古野清孝、清賢。二人とも小さい頃からメカが好き、という以外は、どこにでもいる「わんぱく小僧」だった。そんな二人が大きくなり、清孝が家族に「退学」宣言をした後、実際に口之津町大屋、貝瀬川河口付近で、ラジオを主に扱う「古野電気商会」を立ち上げたのが、18歳のとき。当時14歳だった清賢とともに、小さいながらも洋々とした船出だった。



船の電気工事を手掛けていたころの古野家中列右から2人目が兄清孝氏、後列右が弟清賢氏

堅実な仕事ぶりが評価され、事業は順調。さらに本業だけでなく、副業として、漁船の集魚灯の工事を行うなど、休暇もない毎日には体は壊すこともあったという。

泡が出たりやかなり魚は下におる

そんな二人に世界の漁業を変える出逢いがあったのは、昭和18年。清孝22歳の夏のことだ。

照り返しのひどい甲板の上で作業をしていると、親しくなった船頭が言った。

「俺は、海の中に、魚がいるかどうかわかる。それも魚が何百箱とれるかまで」



1940年ごろの口之津棧橋

「泡が、魚も生き物だから呼吸する。1匹くらいの呼吸じゃ泡は出ないが、山ほどの魚の群れが呼吸すれば泡ができる。逆に言えば…」

船頭は、ふっつと息を吐くと言った。

「泡が出るそのすゝ下には、必ず魚がいるのさ」

清孝の背中に稲妻が走った。

泡で魚が捕れないか

終戦を間に挟んで、ときは昭和20年の暮れ。次頁に続く